まだまだたくさん。どれもみんな楽しそうですよね。イベントの折の写真を見せていただきましたが、皆さん目を輝かせていて、いきいきした様子が見て取れました。

また、ボランティアによる慰問や奉仕活動に訪れるグループもたくさんあります。歌、踊り、手品、祭りのおみこし、時にはチビッ子たちのお遊戯も。地域のかたたちと交流の機会を持てるのは、とても喜ばしいことだと思います。

さらに、施設には、衣類やおやつの出張販売もやって来るのだそう。そんなときに自分のお金で好きなものを買うことも一つの楽しみなのでしょうね。

お年寄りということで、心配になるのが入所者の健康の問題です。でも、水交苑では毎週定期的に内科と外科の医師に往診に来ていただいていますから、その点についても安心です。

工藤施設長

問題点と今後

水交苑に入所されているかたは現在八十人いるのだそうです。その内訳は、大館市のかた七十三人、比内町・田代町から各三人、二ツ井町から一人となっているとのこと。八十人というのはこの施設の定員いっぱいの数であり、空きが出しだい、待機している申請者に入所していただいているのだそうです。しかし、施設に入所したくても入所できずにいるかたは現在百四十人にも上っていると聞きました。なんと、定員をはるかに上回る数ではありませんか。待機している間に入所希望者が病気になってしまうといったケースもあるのだそうで、なんともやりきれない気持ちになりました。

自宅で楽しく老後を送れるのであれば、それにこしたことはありません。しかし、それがかなわないために施設のお世話にならざるを得ないかたも少なからずいらっしゃるのです。そんなかたたちは、やはり寂しい思いを抱いてしまうのでしょうね。水交苑をはじめとした老人福祉施設では、そんな気持ちにキメ細かい配慮をしてくれています。それが仕事であるからとはいえ、まったく頭の下がる思いです。

ただ、それで完全であるといえるのでしょうか。ここで、一つの例をご紹介しましょう。私の知人から伺ったお話です。

「申請してから九年待ってようやく入所できました。お陰様でお世話をいただき、大変ありがたく思っています。お世話になっているお礼に何かできないだろうか、と思っていたら、入所者の家族会による草取り奉仕活動があると聞きました。さっそく参加しましたところ、五、六人しか参加しておらず、とても残念でした。入居者が八十人いるのに対して、その家族が五、六人というのは…」。

お金を納めてさえいればそれでいいというのではあまりにも冷淡に過ぎないでしょうか。それでなくても、入所者は家族と離れて生活して、寂しい思いを抱いているはずですのに。『福祉はプロにおまかせ』ではなく、家庭内にもっと福祉の心が育たなければならないな、と痛感しました。

日本では今後、高齢者人口の割合が増える一方であるといわれています。今、無関心でいる年代のかたも、やがて老いるときが来るでしょう。その時、自分が寂しい思いをするとしたらどうでしょう。今年、県内初の福祉系短大である秋田桂城短期大学が、この大館に開設されました。ここの人間福祉学科で学んだかたたちは、社会福祉主事や社会福祉士、介護福祉士などの資格を取得して、老人福祉施設をはじめとする福祉の分野で活躍することになります。また、北部老人福祉総合エリアという大規模な福祉施設整備計画も着々と進行していると聞きます。私たちはそんな福祉の街大館の市民です。他人ごとのように傍観することなく、もっと積極的な関心を寄せていきたいものです。

菜園の苗植え